

# 湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

大学名 湘南医療大学  
所属 保健医療学部リハビリテーション学科  
作業療法学専攻  
名前 池田晋平  
作成日 2025年5月29日

## 1. 教育の責任

私は 2025 年度 4 月より、本学保健医療学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の教員として着任した。本学においては、以下の授業科目を主に担当する予定である（オムニバス形式を含む）。

- 老年期作業療法学Ⅰ（総論）（3 年次前期・必修）
- 老年期作業療法学Ⅱ（各論）（3 年次後期・必修）
- 地域作業療法学Ⅱ（老年期障害）（3 年次前期・必修）
- 地域作業療法学Ⅳ（身体障害・発達障害）（3 年次後期・必修）
- 作業療法理論（3 年次前期・必修）
- 地域高齢者支援論（3 年次前期・選択）
- 作業療法基礎ⅡA（1 年次前期・選択）
- 作業療法研究法（3 年次前期・必修）
- 作業療法研究法演習（3 年次後期・必修）
- 作業療法研究（4 年次通年・選択）
- 地域リハビリテーション実習（作業療法）（3 年次前期・必修）

これらの授業は、学内外で得られた研究等による知見を教育に還元することも努めていく。具体的には、自身が取り組むヘルスプロモーションに関するフィールド研究の紹介や、エビデンスに裏付けられた作業療法の実践を教授することである。また、日本作業療法学会や東京都作業療法士会の活動等を通じて、現場の課題や最新の研究動向を授業内容に反映させていく。

前任校の大学でも、作業療法士養成課程で約 10 年間にわたり教員を務めてきた。そこでは主に「地域作業療法学」「老年期作業療法学」（いずれも 3 年次）、「日常生活活動学／住環境整備学」（2 年次）、「早期臨床実習」（1 年次）、「卒業研究」（4 年次）など担当した。これまで経験してきた教育・研究・現場の経験を活かし、本学の教育環境および学生の特性に応じて、柔軟かつ実践的な教授方法を工夫し、教育の質の向上に努めていきたい。

## 2. 私の理念・目的

### 1) 私の理念

私は「時代の変化やニーズに対応できる作業療法士の育成」を教育の根幹に据えている。少子高齢化や社会的孤立、貧困など地域で暮らす人々の多様な課題に目を向け、学生が社会課題に関心を持ち、自ら地域に出向き、世代を越えて人と関わる学びを育むことを大切にしている。前任校では講義だけでなく、地域の通いの場、こども食堂、障害者施設、高齢者の健康教室にて体験型授業を積極的に展開してきた。こうした学びの場を設けることで、学生自身が当事者の声を聞き、現場の課題と向き合いながら、専門職としての視野

と実践力を養うことができる。学生には、知識や技術だけでなく、自ら考え、行動し、他者と協働できる力を身につけて欲しいと願っている。

学生と関わる中で、私は「目をかけ、声をかけ、手をかける」という信念を大切にしている。授業に遅れがちな学生にも丁寧に寄り添い、リアクションペーパーのコメントや学習方法の助言を通じて、学生が自己成長の実感を得られるように支援していきたい。学生が「できた」「面白い」と感じられる授業づくりを行い、笑顔と優しさを持って、誰もが安心して学べる教育環境を提供していきたい。

## 2) 理念をもつに至った背景

私が「時代の変化やニーズに対応できる作業療法士の育成」を教育の柱に据えるようになった背景には、近年の作業療法における重点目標として、「地域共生社会」の実現に向けた取り組みが掲げられていることがある。とりわけ、地域ごとの多様なニーズに応じ、すべての人の活動・参加を支援していく作業療法の展開が重要視されている。そのため、養成校教育の段階から地域への関与を意識することが大切だと考えている。

こうした背景のもと、学生のうちに地域に出向き、対象者の「生の声」に触れる実体験を重ねることは、課題への関心を高め、将来の実践への動機づけにもつながると実感している。臨床実習では制度上、一次・二次予防の視点で地域住民と関わる機会が限られている。したがって、臨床実習のカリキュラムの枠外で、意図的に機会を設ける必要があると感じている。

若い世代である学生には、柔軟な発想力と可能性に満ちている。その力を地域課題の解決に活かすためにも、早い段階から現場に触れ、当事者意識を育むことが重要と考える。学生自身が「できた」「変わった」と実感できる体験は、主体的な学びの原動力になる。このような学びの場づくりを通じて、私の教育理念は形づくられてきた。

## 3. 教育の方法・戦略

これまで私は「時代の変化やニーズに対応できる作業療法士の育成」を基本方針とし、教育実践に取り組んできた。特に前任校では、体験型・課題解決型の授業を通じ、学生が実社会とつながる機会を意図的に創出し、現場感覚と実践力を育むことに力を入れてきた。以下に、教育の方針とそれを具体化している例を挙げる。

### 【教育の方針】

- 地域の実情や社会課題に関心を持ち、柔軟に対応できる人材の育成
- 知識・技術の習得にとどまらず、「他者と協働しながら課題解決に取り組む力」の醸成
- 学生が「できた」「変わった」と自己成長を実感できる教育の提供

### 【教育実践の具体例】

前任校では、以下のような授業を展開してきた。本学においても、これらの教育実践を地域の特性や学内環境に応じた形で段階的に取り入れ、実践的な教育を充実させていきたいと考えている。

- 地域づくりを体験する授業の実施

地域のこども食堂、障害者就労支援施設、高齢者の通いの場などに学生が出向き、商店街の活性化イベントの企画や福祉的なまちづくりに参加。地域住民と関係性を築き、協働するプロセスを学ぶ。

- プロジェクトベースの学習（PBL）

地域包括支援センターや社会福祉協議会の協力のもと、社会的孤立や予防的介入をテーマとした授業を行い、学生が課題解決に向けたアイデアを出し、実践的な提案力を育成。

- 高齢者の健康教室の企画・運営

自治会やシニアクラブと連携し、学生が考案したプログラム（体操、交流活動、健康講話など）を実施。高齢介護課から視察を受けるなど、行政からの注目も高まった。

- 社会課題や政策への関心を促す工夫

新聞記事などの時事的な話題を取り上げ、日本社会が抱える構造的な問題や国のマクロレベルの政策動向、地域社会（メゾレベル）での取り組みについて学生に紹介した。これにより、授業内容と現実の社会とのつながりを実感し、主体的な関心を高めることを目指した。

- 個々の学生の学修度の確認と個別指導

リアクションペーパーを活用し、理解度の確認と個別コメントによるフィードバックを大切にした。学生をつまづきを早期に把握し、学習意欲や自信の向上につなげてきた。

- 当事者からのフィードバックによる振り返り

フィールド実践やその後の報告会を通じて、当事者を含むステークホルダーから学生が考案したプログラム等の改善点や授業方法について意見をもらい、次年度に向けて改善を図った。

#### 4. 学習成果

本学においては、前期・後期末に実施される授業評価を通じて、教育実践の成果を把握していく予定である。前任校においては、以下のような学生および教員からの評価を受けている。

- 前任校において、2024年度の授業アンケートでは「授業の進め方の工夫」「満足度」などにおいて90%以上の高い評価を得た。一方で、少数ながら「難易度を下げてほしい」との声もあり、個別の学習フォローの重要性を認識した。

- 教員の授業点検では、総合評価3.09であった（4段階評価）。授業中のフィードバックや教材選定の工夫に対して肯定的なコメントが多く、特に学生が主体的に取り組む雰囲気づくりへの評価が高かった。

本学においても今後、授業評価を活用しながら、理解度の確認や個別対応について工夫を重ねていく予定である。

## 5. 改善のための努力

本学においては、授業実践に際して以下の点を教育上の改善点として意識し、学生の理解促進と学修支援に努めている。これらは前任校での実践を通して得られた評価や課題を踏まえたもので、より質の高い学びを提供することを目指している。

- リアクションペーパーはコメント付きで返却するのみでなく、授業内で優れた内容を発表・共有することで学びを促進し、不十分な学生には個別に口頭で助言を行う。
- 小テストやリアクションペーパーの評価を集計することで理解度や学習状況をモニタリングする。段階的評価により学習意欲を高め、つまずきの早期対応につなげる。
- グループワーク／フィールドワークでは教員がグループの状況を注視し、必要に応じてフォローを行う。また事前に動画・写真を活用し、テーマへの理解を深める工夫を行う。

## 6. 今後の目標

本学での教育活動を効果的に展開するため、今年度は以下の短期・長期目標を掲げる。

### □ 短期目標（2025年4月～8月授業評価終了時）

- manaba や講義環境、本学内外の教育資源に応じて授業を構築する。
- 授業評価やリアクションペーパーを通じて客観的な評価を得る。
- 本学学生の特性や個々の学修状況を把握し、授業内容・進行の改善に活かす。

### □ 長期目標（2025年9月～）

- 短期目標で得た学生の理解度や授業評価を土台に、より体系的で柔軟な授業設計を行う。
- 自身の研究成果や現場での経験を教育内容に反映させ、実践的な学びへつなげる。
- アクティブラーニングを効果的に取り入れ、学生が主体的に学び、互いに刺激し合う授業づくりを推進する。

### 【添付資料】

特になし。

以上